

一八八三年三月十一日(日)

ドフキネーシヨル
南神村において、タクール、聖ラーマクリシユナの誕生祝い

早朝、信者と共に

カーリー寺院で今日は、聖ラーマクリシユナの誕生祝いがある。——ファルゲン月白分二日目、日曜。キリスト暦一八八三年三月十一日。今日、タクールの最も親しい信者たちが、この御方を囲んでお誕生祝いをする事になっている。

早朝から信者たちは、一人、また一人と集まってきた。部屋の前は、救いの女神大実母のいますお堂である。夜明けの献灯がすむと、奏楽塔ではやさしい朝の調べが奏でられていた。春なので、草木はみな新しい緑の装いをしていた。そして、タクールの誕生日をよるこんで踊るようにそよいでいる。あたり一面に和楽の気が満ちあふれていた。校長が到着して見ると、バヴァナート、ラカール、バヴァナートの友人カーリークリシユナがもう来ていた。まだたいそう朝早くである。タクールは、彼等といっしょに東かたのペランダに坐られて、笑いながら何か話しておられた。校長は傍にすすみ、床に額ずいてごあいさつ申し上げた。

聖ラーマクリシュナ、校長に、「やあ、来てくれたか」そして皆の方を向いて――

「恥ずかしい、憎らしい、恐ろしい、この三つがあるうちはダメだ。今日はほんとうにうれしい日だ。だがね、ハリ（神）の名に夢中になって歌って踊れないような奴は、いつまでたっても悟れないよ。神さまのどこが恥ずかしい？ どこが恐ろしい？ サア、お前たち、歌え」

バヴァナートとカーリークリシュナが歌う――

祝え 祝え この日 この歓びの日

君 説き給う 眞実の法を

みな力あわせて この国に伝えん

この胸も かの胸も 君が住み家^か

ここに かしこに 四方にとどろくは

尊き君の 徳高き御名^{おん}

信ずる人びと 今日の日 集いて

声をあわせて ほめ讃え祈る

われら 富も人も名も求めず

主よ ほかに何も希むものなし
ただひたすらに 気も狂おしく
君を求めて 恋い慕うなり

主よ 君の御足の許にありて

災いも恐れず 死も恐れず

われら不死の 甘き泉を得たり

光榮^{はえ}あれ 光榮^{はえ}あれ 君の御名^{おん}に

タクールは手を組んで一心にこの歌を聞いておられた。聞いておられるうちにすっかり、酔ったように恍惚となられた。タクールのお心はよく乾いたマツチ棒のように、ちよつとこすればすぐ火が着くのだ。ふつうの人間の心は湿ったマツチ棒のようなもので、いくらこすつても火がつかない——世間的なことに執着しきっているからである。タクールは長い間、深い瞑想に沈んでおられた。しばらくたつと、カーリークリシユナはバヴァナートの耳に何かささやいた。

〔ハリの名を称えぬ先に労働者を教育するのか?〕

カーリークリシユナはタクールにおじぎをして立ち上がった。タクールはびっくりしてお聞きに

なった。

「どこへ行くの?」

バヴァナート「はい、この人はちよつと用事がありまして、それでお暇いそぎするのでございます」

聖ラーマクリシュナ「何の用で?」

バヴァナート「はい、バラナゴルの労働者講習所へ行くのです」

カーリークリシュナは部屋から立ち去った。

聖ラーマクリシュナ「額ひたに書かれていないんだね。今日は皆で、ハリの名を唱えて楽しく過そうというのに——。気の毒な人だ!」(訳註——インドではその人の運命が額に書かれていると言われている)

信者と共に誕生祝い、出家修道者のきびしい戒律

時間は大体、八時半から九時ころ。タクールはこの日、ガンジス河での沐浴はなさらなかった——お体の調子がよくなかったからである。前もつて沐浴のための水を河から壺で運んできて、ベランダに置いてあつた。信者たちに付き添われて、タクールは沐浴をすまされた。沐浴をされながら、「壺に一ぱいだけ水をとっておいてくれ」とおっしゃる。そして、最後にその水を頭あたまに注がれた。タクール、聖ラーマクリシュナは、今日は特に注意深くされて、あまり多くは頭にお灌そそぎにならなかった。

沐浴がすむと、やさしい声で神の名を称えられた。それから、洗つてあるきれいな衣服を身につけられ、一、二の信者たちを連れて、南に向けてカーリー神殿の石だたみの境内を通つて、大実母カーリー

のお堂に向かつて行かれた。お口では絶えず称名していらつしやる。視線はうつろというか——卵をあたためているときの親鳥の目のような視線めまきである。

大実母カーリーのお堂に行つて礼拝をして祈られた。タクールに祈りの形式などはない。白檀香と花を大実母の足もとに供えたかと思れば、こんどは又、ご自分の頭の上にのつけたりなさつてゐる。さいごに大実母のところから供えてあつた花輪を頭の上にのせたまま、バヴァナートにおつしやる。「青ココナツツを持つていけ、ほら、そのカーリーかあさんに供えてあるココナツツをさ——」

それから又、石だたみの境内を通つて、ご自分の部屋に向かわれた。お供をしていたのは校長とバヴァナートである。バヴァナートは手にココナツツを持つてゐる。道の右手は聖ラーダーカーンタ堂、タクールのお口ぐせでは、ヴィシユヌの家である。このラーダーとその恋人クリシユナの像にまみえて額ぬかずいて拝礼された。それから、左側にある十二のシヴァ堂でサダーシヴァ(永遠のシヴァ)の神像に向かつて、ひとつひとつ御あいさつなさつた。

タクールはやがて部屋に戻られた。見ると、ほかの信者たちが集まつていた。ラーム、ニティヤゴパール、ケダル・チャトジーをはじめ、大ぜいが来ている。彼等はみな床に額ぬかずいてタクールにごあいさつ申し上げた。タクールも、彼らの近況を尋ねられた。

タクールはニティヤゴパールを見ておつしやる——「お前、何か食べるかい？」この信者を自分の子供のような気持ちで見えておられるのだ。彼は未婚で年のころ二十三、四才、常に靈的に高まつた精神状態にいる青年である。タクールの許もとに時々一人で来たり、ラームといつしよに来たりしていた。

タクール、聖ラーマクリシュナは彼のこうした精神状態をごらんになって、やさしく愛情を注いでおられる。あの方は大覚者パラマハンサの境地だ——という言葉を取クールはときどき口にされる。そんなわけで、彼をゴパールクリシュナの幼名のように見ておられるのだらう。この信者は答えた——「食べたいです」まるで子供のような言い方だ。

〔ニティヤゴパールへの教訓、出家修行者は女性との交際が禁止されている〕

彼に食べさせたあとで、タクールはガンガーの見える部屋の西端のペランダに彼を連れて行き、何かと話をはじめられた。

三十一、二才になるたいそう信心深い婦人が、タクール、聖ラーマクリシュナのところへ度々訪れては、心からなる尊崇の念を表わしていた。その婦人が、この信者ニティヤゴパールの霊的境地をみて、彼に対して息子のように世話をやいてはひんぱんに自宅へ招いていた。

聖ラーマクリシュナはこの信者ニティヤゴパールにおっしゃる——

「お前、あそこに行つてるのか？」

ニティヤゴパールは子供っぽく「ええ、行きますよ。連れていつてくれるんです」

聖ラーマクリシュナ「聖者さん、気をつけておくれよ！ たまに行くならいいが、あんまり行きすぎるなよ。落っこちるぞ！ 女と金がマーヤーなんだ。修行する者は女の人からうんと遠ざかっていなければいけない。そこに、誰もが落ちておぼれてしまうのだよ。ブラマー創造の神やヴィシュヌ維

持の神)でさえも、そこに落ちてアブアブもがく」

若い信者(ニティヤゴバル)は、神妙に聞いていた。

校長は内心、次のように考えた——「驚いたものだ！ この信者のことを大覚者パワハンサの境地だとタクルは時々おっしゃるが、こんな高い境地にいても、墮落する可能性があるのか！ 修行者に対して、タクルは何というきびしい規律をあてがうことか。女性と親しくしていることで、聖者も高い処からすべり落ちる可能性があるのだ。こうした厳格な手本がなかったら、多くの一般人はどうして救われることができよう？ その婦人はたいそう信心深い人だ。それでも女は恐ろしいのか！ このことがよくわかっていたから、聖チャイタニヤは若い弟子のハリダースに対して、あんなきびしい罰を下したのだ。それが今やつと、私にもわかった。偉大な師マハイブラブ(聖チャイタニヤ)から戒められていたのに、ハリダースは信者である一人の未亡人と話をした。ハリダースは出家修道の身であったのだ。それで、偉大な師マハイブラブは彼を追放した。何というきびしい罰だろう！ 出家の掟の何となく厳しさ！ そしてこの若い信者を、タクルはどんなに愛しておられることか！ 先へいつて身をあやまることのないように——早々と今から注意をされているのだ」他の信者たちは感動のあまりシーンとしている。「聖者よ、用心深くあれ」——この言葉は、信者たちの腹の底まで深く鳴りひびいた。

有形の神、無形の神——タクル、聖ラーマクリシュナ、ラーマの名による入三昧

やがてタクルは、信者たちと部屋の北東のベランダに行かれた。信者たちのなかに、南神村トフキネンヨルの住

人である一家の主人がひとり坐っていた。彼は家でヴェーダーンタ哲学を勉強している。タクルの
面前で彼は、ケダル・チャトジエーと クシャブダ・ナラフマン 梵音（オーム）^グ について話をしていた。

〔タクル、聖ラーマクリシュナと神の化身たち——タクル、聖ラーマクリシュナと万教調和〕
ドツキネシヨル 南神村の住人「この永遠不壊の音（オーム）は、内にも外にも常に鳴りひびいております」

聖ラーマクリシュナ「ただ、音だけしていてもだめだよ、何かその音の実証^{あかし}がなけりや。あんたの
名前をきいただけで、わたしが嬉しくなるかい？ あんたに会わなければ、十六アナ（＝ルビー、つま
り完全な意）の喜びにはならない」

ドツキネシヨル 南神村の住人「この音がブラフマンなのです。この永遠不壊の音が——」

聖ラーマクリシュナ「あー、わかったかい？ ケダル。この人は古代^{むかし}の見神人^{リシ}たちの考え方だ。
リシたちはラーマに向かって言ったものだ。『これ、ラーマ殿、われわれは、あんたのことを神の化身だと言って
の息子だと思っている。バラドヴァーージャのような賢者たちは、あんたのことを神の化身だと言って
礼拝しておられるがね。だが、われわれは全きサツチダーナンダ^{（実在・智慧・歓喜を求めておるのじや）}』
ラーマはこの言葉を聞いて、笑いながら立ち去った」

ケダル「リシたちは、ラーマが神の化身だということがわからなかったのです。リシたちはバカ
だったのですね」

聖ラーマクリシュナはおごそかな口調でたしなめられた——

「あなたは、そういうことを言つてはいけません。人にはそれぞれ好みがある。胃袋で消化こなす力も違う。一匹の魚を、母親は子供たちのためにいろんな風に料理して食べさせて下さる。一人にはピラフにして食べさせる。だが、誰もがピラフのような脂っこいものを消化できるわけではない。そういう子には魚スープにして下さる。胃袋の力をみて、誰かには魚のフライ。酔っぱい魚が好きな子もいる(一同大笑い)。好みに合うようにして下さる。

リシたちは智者だから、それで、全きサッチダーナンダを求めていたのだ。信仰者たちは神の化身を求め——信仰のよろこびを味わうために。あの御方に会えば心の闇は退散する。ブラーナにある話だが、ラーマが宮殿に入ったとき、宮殿の中に百の太陽が一ぺんに昇つたようだったという。それで宮殿に仕えていた人たちが黒焦げならなかったのは何故だろう？ その答えは——ラーマの輝きは物質ものの光ではなかったから。宮殿にいたとき、すべての人の心の蓮華は一時に花が開いた。太陽が昇ると蓮の花が咲くからね」

タクール、聖ラーマクリシュナは、信者たちの傍に立つてこの話をしておられたが、話をしておられるうちに急速に外部意識が退ひいて、心は内深く沈潜した！ 心の蓮華が花ひらく。という言葉が終わるか終わらぬうちに、タクールは三昧に入られた。

かみ至聖を見て、聖ラーマクリシュナの心の蓮華は花開いたのであるうか。まさに、その様子で立つておられた。だが、外部感覚はなくなっているので、絵画のなかの人物のようである。聖なる口元に光輝くほほえみを浮べたまま——。信者たちは、或る者は立ち、或る者は坐り、感動のあまり身動きも

せず、吸いつけられたようにこの靈妙不可思議な愛の彫像を、この前代未聞の三昧図を拝見していた。しばらくすると、三昧は解けてきた。

タクールは深く息を吸いこまれてから、ラーマ、ラーマ、とくりかえして称えられた。その称名の一語一語が甘露の雫であつた。タクールはお坐りになつた。信者たちはその周圍に坐り、ひたすらこの御方を見ていた。

聖ラーマクリシュナは一同に向かつておっしゃる——

「神の化身がこの世にくるとき、普通の人にはわからないものだ——かくれて、こっそり来るからね。三、四人のごく身近な信者には、それがわかるんだよ！ ラーマはブラフマンそのもので、完全な神の化身だということとは十二人のリシだけが知っていた。ほかの大ぜいのリシたちはこう言っていた。

『ラーマよ、我々にとつてあなたはタシヤラタ王の息子だと思つている』

完全無限のサッチダーナンダ（實在・智慧・歡喜・宇宙の本質）を、誰でもがつかめると思ふかね？ 絶対を体得してから、楽しみのためにこの変化の世界に留まつている、そういうのが熟した信仰だ。イ

ギリスでクイーン（女王）に会つてから、クイーンの話をするものだよ。クイーンの仕事についてもいろいろ話すことができる。そのときは、クイーンの話も間違いなくできる。リシのなかでもバラドヴァージャたちは、ラーマを敬い讃えてこう言つていた——『ああ、ラーマよ、お前さまこそ、あの完全無欠なサッチダーナンダです。お前さまは我々のところに、人の姿になつて現れた。まことに、お前さまは自らのマーヤーで自分をかくしているので、我々にはお前さまが人間のように見えるので

す!」バラドヴァーージャたちは、ラーマの一番すぐれた信者だった。あの人たちの信仰は、熟した信仰だった」

讚神歌のよろこび、及び入三昧境

信者たちは、この神の化身アヴェターラの原理を心から感動してきいていた。なかの何人かは、次のように考えていた——驚くべき意見だ! ヴエーダには、完全無限アカンダのサッチダーナンドは、人間の口説を超え、心を超えたものだと言われている。その超越意識が、我々のような3キュービット半(16cm)の体をもつ人間となつて現れるとは——。タクール、聖ラーマクリシュナがこのように話されたからには、絶対にそうに違いない。おっしゃったことが事実でなかつたら、この偉大な魂マハアトルが、ラーマ、ラーマと称えながら三昧に入る筈がないではないか? たしかにこの御方は、心の蓮華でラーマの姿をご覧になつたのである。

そうしているうちに、コンナガルからの信者たちが、横太鼓コトルとカルタル(小さいシンバル)にあわせて讚神歌キルタンをうたいながら庭を通つて入つてきた。マノモハン、ナヴァイはじめ、その他大ぜいが称名歌をうたいながら北東のペランダにおられるタクールの傍に着くと、タクール、聖ラーマクリシュナは神聖な愛のよろこびに酔いしれて、彼等といっしょに讚神歌をうたい踊られた。

踊りながら、時おり三昧に入られる。讚神歌の途中で、絵のなかの人物のように不動の姿で直立しておられるのである。その有様に信者たちは、その御方に花の首飾りをしてさしあげた。大きな美し

い花の輪かざりである。信者たちは聖ガウランガ(チャイタニヤ)に面と向きあっているような気がした。深い三昧に没入して主と交流されるときは、絵にかいた人物のように外界の感覚意識はさららない。また、半意識状態では、神の愛に酔って踊りつづける。或いはまた、聖ガウランガのように外界意識のはっきりした状態で、信者といっしょになって讃神歌をうたわれる。

タクールは三昧に入つて、直立しておられる——首に花輪をかけて。倒れないようにと気づかつて、一人の信者が抱き支えている。囲りでは信者たちが横太鼓とカルタル(小さいシンバル)の伴奏に合わせて讃神歌を合唱している。タクールの視線は動かない。月のように気高い表情は、聖なる愛の情熱にやや紅潮して——西を向いて。

この至福の姿を、信者たちは相当のあいだ拝見しつづけていた！そして三昧はやがて解かれた。もう、昼食の時間である。間もなく讃神歌も止んだ。信者たちはタクールにお食事を差し上げるため、きびきびと立ち働いた。

タクールはすこし休息をされて後、新しい黄色のお召し物を身につけられ、小ベッドの上にお坐りになった。黄色の装いは、至福に満ちた大聖者のお顔によく映えて信者たちを喜ばせたので、彼等は飽くことなくこの何とも素敵な姿に眺め入っていた。神々も及ばぬほど純粹、清浄で、しかも人の心を魅了して止まない姿を眺めるとは、まことに目のよろこび、ここに極まった感じである。ためつ、すがめつ、こちらから見、あちらから眺め、美の大海に自らおぼれて、沈んで——。

タクールは食事の席につかれた。信者一同も楽しくお相伴した。

ゴースワミーに万教の調和を語る

食事をすまされてから、タクール、聖ラーマクリシュナは小ベッドで休息しておられる。部屋は人の数が次第に増してきている。外のベランダも満員である。部屋のなかにいる信者たちは、床に坐つてみな一様にタクールの方を見上げていた。ケダル、スレシユ、ラーム、マノモハン、ギリンドラ、ラカール、バヴァナート、校長などがある。ラカールの父親も来て坐つていた。

一人のヴィシユヌ派のゴースワミー(在家の宗教指導者)が来ていた。タクールはその人に声をかけて話をされた。ゴースワミーたちを見さえすれば、タクールは必ず頭を下げてあいさつなさるのが習慣きまりであった。時には面と向かつて、身体を真っ直ぐに投げ出しての礼拝(シヤスタンガ・プラナム)をなさることもある。

〔称名の偉大さか？ 熱愛か？——アジャーミラの話〕

聖ラーマクリシュナ「さて、あんたは何と説教する？ 解脱の方法は？」

ゴースワミー「称名するだけでよいと教えております。今の時代は、神の御名をとなえることが最も尊い修行なのです」

聖ラーマクリシュナ「フム、称名が大そう尊くて力があることはたしかだがね。でも、心から熱愛アスラーガしなければ、どうにもなるまい？ 命がけて神を恋い慕うことが大事なんだよ。口先だけで称名して、

心では女と金のことを考えている。これじゃ、どうにもなるまい？

サソリや強盗に刺されたときは、呪文まじなだけとなえていても治らんよ。牛糞を燃やした煙も要るい（訳註、牛糞を燃やした煙——ベンガルの田舎で昔から行われている治療法）

ゴースワミー「ですが、アジャーミラは？ 彼は大悪人で、罪という罪は一つ残らず犯しました。けれども死ぬ時に、ナーラーヤン」と言つて、大神ナーラーヤナと同じ名の息子を呼びました。その功徳で救われたというではありませんか」

聖ラーマクリシュナ「多分、アジャーミラは前世でたくさん善い仕事をしたんだろうよ。後で苦行をしたとも言われているし——。

それは、一生の終わりのころだったそうだがね。象に行水をつかわせても無駄だ。すぐまた、泥まみれになつてしまうからね！ だから、象舎こやにつなぐ前に汚れを落として行水させてやれば、体はきれいなままでいる。

称名すれば身も心も清められる。だが、その後でまた、いろんな罪深いことをするかもしれない——意志が弱いからね、みんな。もう二度と悪いことはしない、と固く決心をしないからなんだ。ガンジス河で沐浴すれば、罪はみんな逃げて行く。逃げて行ってどうなる？ いろんな罪の塊が岸辺の樹にとまつてるそうじゃないか。ガンジスの聖なる水から人が上がってくるや否や、さつき逃げ出した罪が樹からその人の肩にとび移るそうだ（一同笑う）。そのお馴染みの罪がまたしつかりと肩にとりつく。沐浴をして二本の足が聖なる水から出るか出ないうちに、すぐまた肩にとりつくんだ

よ！

こういうわけだから、称名するといっしよに神様に祈りなさい——神のことに情熱が持てるように。金、名誉、五官の楽しみなどに執着する気持ちがだんだん減っていくようにと、お願いして祈れ」

〔ヴィシユヌ派の教義と宗派根性(セクト主義)——万教の調和〕

聖ラーマクリシユナ、つづけてこのゴースワミーに話される。

「真心こめてやりさえすれば、どんな宗教に入っても神様がつかめる。ヴィシユヌ派でも神様がつかめるし、シヤクテイ派でも、ヴェーダーンタ派でも、ブラフマ協会の会員でもちゃんとつかめる。それにイスラム教徒だって、クリスチャンだって、みんな掴める。真面目に熱心に信仰していれば、誰でも神さまをつかむことができるのだ。中にはイチヤモンをつける連中もあるよ。こう言うんだ——『我々のクリシユナを拜むのでなければ、決して救われぬ』とか、『いや、我々の大実母カーリーを拜まなければ救われぬ』とか、『我々のキリスト教を信じなければ、永久に救われぬ』とか。これが宗派根性というものだ。つまり、自分の宗教だけが正しくて、ほかのは皆、邪教だという。この根性が悪い。神様のところへはいろいろな道を通って着くのだ。

また中には、神には形がある。形のない神などはあり得ない」と言い張る連中もある！ ヴィシユヌ派とヴェーダーンタ派はこの点で口論しているようだ。

もし、神様に直接に会ったなら、正しいことが言えるだろう。会ったことのある人なら、神は有形

でもあり、また無形でもあるということをはっきり知っている。それに、あの御方はこうだと言いつけることなど出来ないのだ。

何人かの盲^{めくら}たちが象のそばを通りかかった。誰かが、『その動物は象だよ』と教えてくれた。すると、盲^{めくら}たちは象とはどんなものだろうかと思つて、皆して象の体にさわりはじめた。一人が、『象は柱のようなものだよ！』と言つた。かれは脚に触つていたのだ。別の一人は、『象はウチワみたいなものだ！』と言つた。耳にだけ触つていたのだ。ほかのものは鼻や胴に触つて、また違うことを言いだした。同じように、無限の神の一部分だけを見て、神とはこんなもの、これ以外にない、と思ひ込んでいるんだよ。

一人の男が用を足してかえつてきて、『樹の根元できれいな赤トカゲを見たよ』と言つた。別の人が、『私はあんたより先にあの樹の根元に行つたが、あれは赤くなんかあるものか。私はよくよく見たけれど、あれはぜつたいに緑色だった』と言ふ。又ほかの一人は、『あれは私だつてよく知っている。あんた方より先に行つたとき私もあのトカゲをよく見たが、赤くも緑でもなかったよ。ぜつたいに青だよ』と言ふ。また別の二人は、『黄色だ』『灰色だ』と言ひ張る。皆違ふ。しまいにけんかをおつはじめた。みんな、自分が見たんだから正しいと言ふ。このケンカを見ていた或る人が、『何でけんかをしているんですか？』ときいた。しかじかの理由^{わけ}をきいたとき、その人は言つた。『私はあの樹のすぐそばに住んでいる者です。あの動物のことはよく知つている。あんた方の言つていることは皆ほんとうですよ。あのトカゲはね、緑になったり、青になったり、いろいろな色に変わるんです。そして

全く無色のときもあるんです」

「有形の神か、無形の神か」

(つづけてゴースワミーに——)

「神には形がある、とばかり言っていてはだめだよ。あの御方は、聖クリシュナの場合のように人間の体をとって現れる、というのも真実だ。いろんな姿で信者たちに会ってくださる、これも真実だ。それから、あの御方は無相無性で完全円満なサッチダーナンダ、これも真実だ。あの御方は有形、無形の両方であり、無性であつて同時に一切性である、とヴェーダでは言っている。

どういふことか、わかるかい？ サッチダーナンダは無限の大海のようなものだ。寒さが海の水を凍らせて、いろんな形の氷が海に漂っている。それと同じように、信仰の力がサッチダーナンダの海に形ある神を見ているのだよ。形ある神は信者のために現れている。そして、智慧の太陽がのぼると氷はとけて元通りの水になる。下も上も全部が水また水。だからシユリーマッド・バーガヴァタにはこんな讃歌があるよ——主よ、御身こそ形ある神、御身こそ形なき神。われらの前に人となりて歩きたまえど、御身こそ、言葉と心を超えたるものとヴェーダは語る。

しかしまた、ある種の信仰者たちにとっては、あの御方は永遠に変わらぬ姿をした神だ、ということも出来る。無限の海には、決して氷がとける時のない場所もあるからね。そこでは氷が水晶みたいになつているんだよ」

ケダル「はい。そして、シュリーマッド・バーガヴァタには、ヴィヤーサが三つの罪科とがについて至尊かみに赦ゆるしを乞うて祈ったことが書いてあります。こう言つて——『おお、至尊かみよ！ あなたは言葉と心を超えた御方、にもかかわらず私めは、あなたの活動りいらいを、あなたの形に現れたもろもろの相すがたを、語り、そして書いております。即ち、この我が重き罪科とがをゆるし給え』」

聖ラーマクリシュナ「そうだよ、神は有形サカヨウでもあり無形ニライカヨウでもある。またその上、有形、無形を超越したものだ。あの御方はコレだ、ときめつけることはできない」

タクール、聖ラーマクリシュナ——欲望を離れた若き永遠の完成者と

ラカールの父親も坐っていた。ラカールは最近ちかごろ、ずっとタクールの許に滞在しているのである。ラカールの母親が他界した後、父親は再婚していた。ラカールがここにいるので、父親も時々来るのだ。息子がタクールの許で生活することに、とりたてて反対もしていない。裕福な上に、世俗的な人物なので、年中訴訟しんそごとをしていた。タクール、聖ラーマクリシュナのところには大ぜいの弁護士や代

(原典註)

おお、宇宙の主よ！ 我が弱さのゆえの 三つの罪科つみとがを赦ゆるしたまえ

あなたは形なき御方 にもかかわらず 我 あなたの姿形を瞑想せり

あなたは言葉を超えた御方 にもかかわらず 我 あなたを讚美する歌をうたえり

あなたはすべてに遍在する御方 にもかかわらず 我 あなたを慕いて聖地を巡礼せり

理治安官が出入りしているので、ラカールの父親はその人たちと話をするために時々来るのである。彼等から有益な情報やアドバイスが得られるのだろう。

タクール、聖ラーマクリシユナは、時おりラカールの父親を見やっておられる。タクールのお希みは、ラカールがずっとこのまま南神村ドフキネーシヨルで自分といっしょに暮らすことである。

聖ラーマクリシユナは、ラカールの父親とその周囲まわりにいる信者たちに向かつておっしゃった——「ああ、近ごろのラカールの様子といったら！ この子の顔をよくみてごらん。時々、唇が動くだろう!? 心の中で神様の名を称えているんだよ、きつと。だから唇が動くんだ。

ラカールのような若者たちは、^{ニテイヤ・シツダ}永遠の完成者^クの階級だ。神の智慧を持って生まれてきている。すこし年がいくと、世間に触れることの危険に気付くのだ。ヴェエダにホーマ鳥の話があるが、あの鳥は大空高くに住んでいて、けっして地上には降りてこない。卵も大空で産む。卵は落ちはじめると、高い高い処に鳥の巣があるものだから、落ちていく途中でヒナがかえる。ヒナも又、落ちつづける。まだ高い処だから、落ちていくうちに羽が生え目が明く。すると、自分は地面に向かつて落ちていくところなのだ、ということがはっきりわかるんだよ！ 地面に堕ちたら死ぬんだ！ 地面を見たときに、ヒナは向きをかえて母親の方角へ向かつてものすこい速さでかけ昇る。そうして、母親のところへ戻り着く。母親の傍へかえることだけが目的なのだ。

この若者たちは、まさにこのホーマ鳥のヒナだ。子供のころから世間をおそれる。そして、ただ一つのことを考えている。どうやって母親の傍へ行こうか——つまり、どうやって神をつかもうかと。

俗人の両親から生まれ、欲深い連中の中で大きくなったのに、どうしてこんな信仰や智慧が得られたか——それはこういうわけだよ、豆は糞の山に落つこちでもちゃんと豆の木になる。しかも、その豆は質がよくてえらく役に立つ。糞の山に落ちたからつて、豆が別の木になるかね？

ああ、ラカールは近ごろ、一段といい境地になった。そうならんでどうなる？ 山芋がよければ、そこから出る子芋もいいに決まってる（一同笑う）。お父さんがよければ息子もいい！」

校長は傍（かたわら）のギリンドラに向かって話しかけた。

校長「有形の神と無形の神について、この御方は実によく説明してくださいましたね。ヴィシュヌ派では有形の神（人格神）だけしか認めないのでしょいか？」

ギリンドラ「そうですね。彼等は単純だからねえ」

校長「永久に変わらぬ形をもつた神」ということを、あなたはおわかりになりますか？ さつき
の水晶のような氷の話ですが、私にはどうもよくわかりません」

聖ラーマクリシュナ、校長の方を向かれて——

「あ？ 何の話だい？」

校長とギリンドラは少し笑って黙っていた。

女中のプリンデ「あのう、ラームラルさん、こちらで食事がすんだら、私はそのあとでいただきますが——」

聖ラーマクリシュナ「おや、プリンデはまだ食べていなかったのかい？」

1883年3月11日(日)

五聖樹の杜で歓びのキールタン

午後、信者たちは五聖樹パンチャパテイの杜で讚神歌キールタンを合唱した。タクール、聖ラーマクリシュナも彼等といっしょになって歌われた。信者一同、大実母の名を讃えて歓喜に満ち溢れた一日だった――

シャーマの御足もと 大空高く

わたしの心の風は天翔けていた

よこしまな風をまともにもうけて

急にかたむいて落ちてしまった

煩惱の荷物は重く切なく

心の風はもう上がらない

妻と子のしがらみを抜けようと

もがけばもがくほど破れ傷つく

智慧の頭はかたく重くなり

無理にとばせど石のように落ち

付き合っていた六人の仲間に
わたしはとうとう負けたのか

六人の仲間〓六つの敵——色欲、怒り、貪欲、
高慢、嫉妬、愛着

信仰の紐をしつかり結んで

勝負あそびに來たつもりが途方にくれた

ナレスチャンドラは泣き笑いで

ナレスチャンドラ——ベンガルの見神者、

「やっぱり來ずに一人でいればよかった」

詩人

再び歌がはじまった。歌の合間に、横コト太鼓トルとカルタル(小さいシンバル)の伴奏がはいる。タクールは
信者といつしよになつて踊つておられる——

わが心 黒蜂のごとく

シャーマの青き蓮華の御足に魅せられたり

(シャーマの青い蓮華の御足!) (はやし)

(カーリーの青い蓮華の御足!) (はやし)

この世の花 色美しく 甘くとも

空ひなし うとまし

御足は玄く、蜂も黒く

玄と黒、ひとつになりて

さまざまの深き理

また見えつ、また幽れつ

カマラーカーンタの胸にいだける

その希いも、いつか満たされ

苦も楽も、一味妙なる

歓喜の海に泳ぎ入るなり

讚神歌はつづいた。信者たちは歌う――

(歌)

シャーマ母さま、玩具をつくり

カーリー母さま、玩具をつくり

五尺あまりの、玩具のなかで

おかしな遊びを、してみせる

カマラーカーンタ――ベンガルの詩人

シャーマ――カーリーの愛称、黒色の意

(歌)

あなたは玩具の なかにいて
たくみな糸で あやつるが
玩具はそれを 知らないで
自分で動くと思っている

玩具がそれを 知ったとき

もうそのときは 玩具じゃない

信仰の糸で 母さまの

シャーマをさえも 縛ります

この世に来たのは ダイスあそびの
いい点とろうと期待して
期待のわりに調子はよくなく
はじめに小娘の札をひいた

つづけて十八、十七

こんどはいい札だったが

さいごに十二で女の髪に

引かれて妻の手におちて

五の札 六の札 とうとう囚人とりこになったわい

五の札||五パンチャ大ダイ——地、水、火、風、空

六の札||六つの敵——色欲、怒り、貪欲、高慢
嫉妬、愛着

信者たちはほんとうに楽しそうだった。すこし休憩すると、タクールは立ち上がられた。部屋にもその付近にも、信者たちが三々五々集まってきた。

やがて、タクール、聖ラーマクリシユナは、五聖樹パンチャパテイの杜から南へ向けて、ご自分の部屋の方角に歩き出された。お伴は校長である。バクル樹台ツラのあたりでトライローキヤ氏に出合った。彼はおじぎをした。

聖ラーマクリシユナ「五聖樹パンチャパテイの杜で皆が歌をうたっているよ。行ってみてごらん——」

トライローキヤ「わたくし、行つて何をいたしましたししょう?」

聖ラーマクリシユナ「何つて、一度行つてみれば?」

トライローキヤ「わたくし、先ほど見てきましたが——」

聖ラーマクリシユナ「そうか、そうか、そりゃよかつた」

聖ラーマクリシユナと在家の宗教

およそ午後五時半から六時ころ、タクールは信者たちとご自分の部屋の南東のベランダに坐つてお

られる。そして、ケダルたち信者一同に向かってこんな話をされた。

「聖ラーマクリシュナ」出世間の修行者たち——かれらがハリの名を称えるのは当り前のことだ。ほかに仕事はないのだから。こういう人が神様について考えたり瞑想したりするのは、別にたいしたことじゃない。修行者が神を瞑想したり称名したりしなければ、皆から悪口を言われるだろう。

ふつうの社会生活をしている人が、もし、称名しているとすれば、それはたいそう感心なことだよ。ほら、あのジャンカ王はずいぶん剛気な人だった。彼は二つの剣を振り廻していた。一つは智慧、もひとつは仕事。一方では完全なブラフマン智を持ち、もう一方では世間の仕事をする。不貞な女はひと通りの家事をしながら、心ではいつも情夫のことを想っている。

修行者と絶えず交際することが大切だ。修行者は神様に近づかせてくれる」

ケダル「おっしゃる通りです！ 偉大な魂は、衆生を導くためにこの世に来給うのであります。機関車が後ろにいくつもの客車をつけて引いて行くようなものです。または、河や大きな池が人間や多くの動物の渴きを癒すようなものです」

やがて、信者たちは帰り支度を始めた。ひとりずつ、タクール、聖ラーマクリシュナを額ずいて拝み、御足の塵をいただいた。バヴァナートを見て、タクールはおっしゃる——「お前は今日、帰るな。お前を見てみると、恍惚となるから！」

バヴァナートはまだ世俗の生活に入っていないかった。年令は十九か二十、色白で美しい容姿の青年である。神の名を耳にすると涙を流す。タクールは彼をナーラーヤナの化身だと見ておられる。